

遭遇・Saucerタイプ UFO

道南・八雲町



2018年4月16日、本誌スタッフが道南の八雲町でUFOに遭遇したその体験記とUFOであると断定したその検証結果である。

『私は同僚と2名で札幌から道南方面へと国道5号線を車で南下していた。

道中の天候は概ね晴れ、長万部、八雲町市街を通過して同町落部で休息のためコンビニの駐車場で車を停めた。

車外に出て何気なく少し前に通過してきた八雲市街方向(北西)に視線を移すと、視線の前方には周りの雲とは趣を異にする特異な雲状の物が出現、滞空していたのに気づきそれを観察した。

形状は凸レンズ状、全体的にはグレーがかった白色だがエッジは濃いグレー色で比較的シャープであった。

見かけの大きさはボーイング747(全長約75m)の1.5～2倍程として見え、高度も低く近距離に感じ圧倒されるような存在感があった。

直ちにiponeのカメラで13時9分～10分の間

に4枚撮影し、その後も観察を続けた。

発見から4分後、レンズ雲として見えていた物は形状を変化させて徐々に薄くなり視界より消えた。

一見するとUFOを想起させるような何とも不思議な物の目撃体験であった。

帰札後もこの目撃体験が脳裏から離れず、自分が目撃、撮影した物は気象学的には『レンズ雲』と呼ばれている様だが、果たしてそれがレンズ雲であるか否かを明らかにすべく、再度現地を訪れ方位、仰角などの測定調査を行った。』

以下は八雲町落部で遭遇した『レンズ雲状物体』の検証結果である。

レンズ雲は、巻積雲、高積雲、層積雲に見られる雲種の一つで、笠雲、傘雲、吊し雲、ロール雲、巻雲などとも呼ばれる。

山や山脈において、強風と地形の影響によって、山頂付近を湿った空気が昇る際に断熱冷却作用により山頂付近山の風下に発生する。



まれに地上付近にも出来るが、主に1,000m級の山の山頂付近に発生することが多く、八雲周辺では、駒ヶ岳(1,131m)、遊楽部岳(1,277m)とそれを取り囲む1千メートル級の5つの山々がその条件に該当する。

八雲市街付近にレンズ雲が発生する必須条件。

①駒ヶ岳に南東からの強い風が吹く

②遊楽部岳に西からの強い風が吹く

札幌管区気象台に4月16日の気象状況を問い

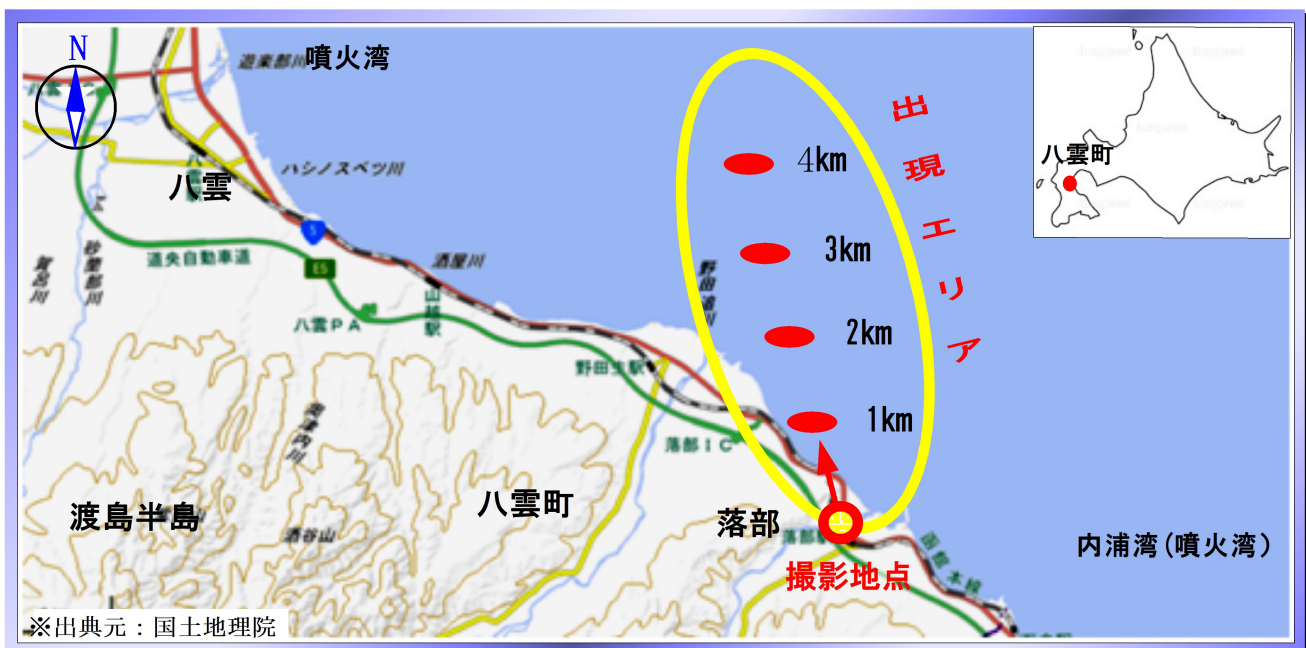
わせたところ、以下の回答を得た。

- ・駒ヶ岳周辺では北からの弱い風。
- ・遊楽部岳周辺で西南西からの弱い風。
- ・北海道上空では西、北西からの弱い風。

これらの回答結果から風の影響でレンズ雲全長ができる可能性は極めて低い。

次にレンズ雲の色の陰影について検証する。

雲に濃淡があるのは太陽光の量に関係しており、太陽に面して光が直接当たれば白くなり、雲の影になると、雲で光が散乱して光の



量が減り、後ろの雲は黒くなる。

また、雲が厚いと太陽光を通さず灰色や黒色がかって見えるのである。

これらの条件に基づいて精査すると、当日の太陽は撮影地点から南西方向、高度、(仰角)約42度の位置にあり、太陽光の反射角度の関係から、もしレンズ雲だとすると雲底が黒くなるはずなのに、エッジのみが黒っぽく見えるのは理解し難い。

厚みがある中央部分が白くなりエッジ部分が黒く見えるには太陽の方位は南側、高度が朝方の低い位置に出ていることが条件となる。

様々な測定数値に基づき作図して物体の高度と大きさを算出すると以下の数値になる。

距 離	高 度	全 長
1km	230m	320m
2km	460m	630m
3km	690m	940m
4km	1000m	1270m

全長(含むフォースフィールド)※四捨五入

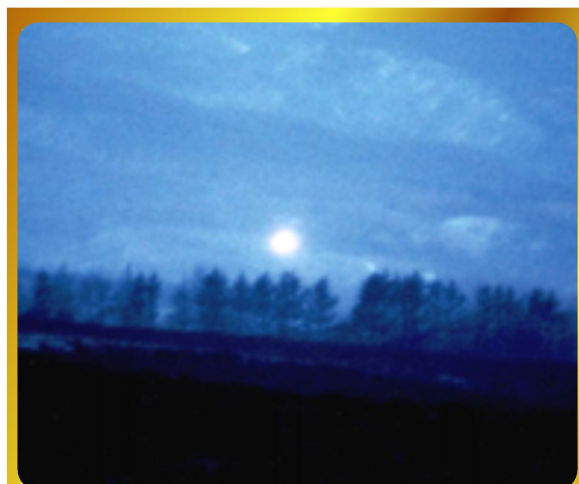
気象情報も含めたこれらの精査の結果から、レンズ雲の発生条件とは明らかに異なった物体の噴火湾上での出現であり、雲として見えた物が実はソーサー状の「UF0」目撃であったと特定するに至ったのである。

UF0を示唆した『白き雲』『濃き雲』『虹雲』『彩雲』などの表現は、古代の民族に共通した呼称でバイブルを筆頭とする多くの古文献にその記述が認められる。

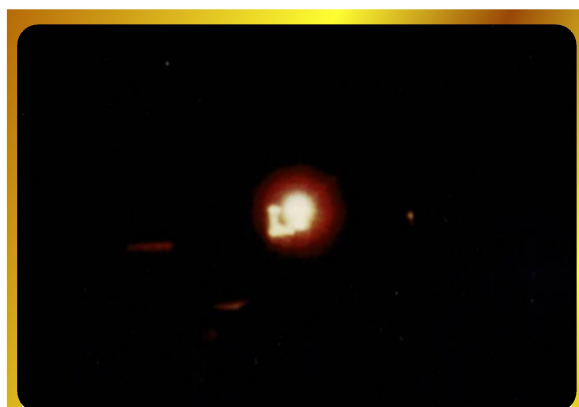
UF0の外周をとり巻く特殊エネルギーとしてのフォースフィールド(力場)が、水蒸気を引き寄せることで外見が雲として見えるのである。

八雲町では過去UF0フラップが発生しているのでその経緯を簡単にご紹介する。

UF0フラップが発生したのは同町大新地区ト



1980年11月8日午後5時頃、八雲町大新地区トコタンの丘で取材中の本誌スタッフが撮影した2機連結UF0 s
撮影者 h. Tamaki 同時目撃者 y. Tachibana



1993年4月21日午後8時24分頃、八雲町トコタンの丘で距離約150m、高度約3mの位置に出現した特殊な小型UF0を取材中の本誌スタッフが撮影。
撮影者 y. Tachibana 同時目撃者 s. Nunokawa
カメラ ニコンF4S、200mm、F2.8

コタン(アイヌ語で廃墟の意味)の丘で、1970年代後半から約2年間に及んでおり、その間地元の建築家が数百枚の写真撮影に成功している。

本誌スタッフ2名が取材調査に赴いたところ夕闇迫るトコタンの丘に吹雪をついて2機連結のUF0が出現、見事にフィルムに収められた。

それ以降UF0フラップはほぼ収まったが、それ以降も時折スタッフによってUF0が目撃、撮影されているのである。 (D. K)